

## さくらと日本人

— さくらに託された日本の心情 —

飯島 利一

Toshikazu IJIMA

### 一 はじめに

日本人は、さくらをどのように愛でてきたのか。生徒がよく知っている、さくらのヒット曲を手がかりに、古来より詠まれた和歌を資料として、さくらに対する日本人の心情を探るのが、この授業のねらいである。「さくらの散りゆく」ようすが、「無常観」や「ものあはれ」をはじめ、日本人の鋭い感性を育ててきたことを学び、さくらは日本的な心のありようを表現し、日本を象徴する花であることを学習する。

学習指導要領の公民科の「倫理」では、学習内容の一つに「国際社会に生きる日本人の自覚」をあげている。その解説によれば、おもに①日本の伝統と文化や日本人としてのものの考え方の特質を理

解させること、②国際社会に生きる主体性のある日本人としての在り方や生き方について思索を深めさせること、この二点を学習の目的としている。これを受けて、教科書や資料集などでは、「無常観」や「ものあはれ」などの日本的な美意識が重要な学習内容のキーワードとして扱われている。今回の授業実践は、これに対応するものと位置づけている。

以下の授業の展開では、実際の授業の雰囲気を再現する形で報告する。●が教師、○が生徒の発言である。また【問題一〜四】および【資料一〜三】、【授業の感想】はワークシートを用意して、授業中に生徒に記入させた。

### 二 授業の展開

(一) 授業のテーマは？ (導入)  
●今日は、新学期にふさわしい授業です。まず、今日のテーマを当ててみてください。次の「」のなかに入る言葉は、何でしょうか (次の和歌を板書する)。

世のなかに絶えて「」のなかりせば

春の心はのどけからまし

〔古今集〕五三二

これは『伊勢物語』の主人公として有名な在原業平の歌です。世の中に、これがなかったら、春はさぞかしのどかに過ごすことができるだろうに、という意味です。何がなかったら、春はのどかなのでしょうか。のどかでいられないほど心を騒がすものとは何でしょうか。○わかからない…。

●ヒントを言います。次キーワードから連想される言葉が「」の答えです。(次の語句を一つずつ生徒に提示する。①遠山の金さん ②上野公園・靖国神社 ③森山直太郎・ケツメイシの歌 ④入学式・新入生など。)

○あつ、わかった。さくらだ。

●そう。正解です。

みなさんは、さくらからどのような連想をしますか。今日は、わたしたち日本人が、さくらをどのような想いで見てきたのか、そして、さくらは日本人にとってどのような存在なのか、みなさんといっしょに探っていこうと思います。

(二) 現代人のさくらのイメージ

●まず、現代の私たちの場合。近年見られる「さくら」に関するヒット曲から考えてみましょう。みんなの知っている曲で「桜・さくら」のつくものにどんなものがあるでしょうか。

○コブクロのさくら

○さくら (森山直太郎)・サクラドロップス (宇多田ヒカル)・サク

ラ咲ケ(嵐)・桜坂(福山雅治)など(以上が、生徒のあげた「さくら」の曲)。

●こうしてあげていくと、意外に「さくら」の曲は、いっぱいありますね。しかも誰もが知っている大ヒット曲です。実はこれらの曲の歌詞を読んでみて、面白いことに気づいたのです。

【問題一】 次のヒット曲(抜粋)は、さくらのどのような様子を歌っているでしょうか。共通して言えることは何でしょうか。

①さくら (森山直太郎)

「さくら さくら 今咲き誇る 刹那に散りゆく運命と知って」

「さくら ただ舞い落ちる いつか生まれ変わる瞬間を信じ」

②さくら (ケツメイシ)

「さくら舞い散る中に忘れた記憶と 君の声が戻ってくる」

「花びら舞い散る 記憶舞い戻る」

③桜 (コブクロ)

「桜の花びら散るたびに 届かぬ思いがまた一つ」

④SAKURA (いきものがかり)

「さくら ひらひら舞い降りて落ちて 揺れる想いのたけを抱き

しめた」

○さくらが舞っている？ 散っている？

●そう、そのとおり。歌詞の内容から共通していえることは、いずれも、さくらが散りゆく情景を描写していることです。友人や恋人との出会いや別れ、せつなく美しい思い出など、想いはいろいろだけれど、すべてさくらの散る様子に託してうたっているのです。咲きはじめや満開ではなく、何故、さくらの散りゆくさまに、その心情をこめるのでしょうか。

(三)「さくらの散りゆく」ようすをどのように見たのか

わたしたち日本人が、散りゆくさくらに魅了され、想いを込めるのは、歴史をさかのぼって確かめることができます。そこで、私たちの先人が、「さくらの散りゆく」ようすから、何を表現してきたのか、和歌などから分析してみましよう。

【問題二】 つぎの和歌の「」に入る言葉は何でしょうか。さくらが咲いては散っていく様子に、もつともふさわしい言葉はこれ以外にないと言っています。(あ) (い) (う) (え)のうち、これと思うものを選んでください。

「」をほかにもいはじ桜花

咲きては散りぬあはれ世の中

(藤原定実『新古今集』)

(あ) かなしさ

(い) せつなさ

(う) はかなさ

(え) うれしさ

○「せつなさ」か、「はかなさ」だと思ふ。

○「うれしさ」はないと思ふ。

●なかなかいい。日本的な感性だと思えますよ。正解は(う)「はかなさ」です。これは、貴族から武士の世にかわり、時代の移ろいを嘆く、大徳寺左大臣、藤原定実の歌です。

今を盛りと咲き誇る満開のさくらが散っていくようすに、諸行無常・盛者必衰などの仏教的な「無常観」を感じています。この世は絶えず移りかわる世界で、人の一生もはかなくむなし。この「無常観」は、やがて「ものあはれ」という日本人的な、独特の情緒につながっていったと考えられます。「もののあはれ」とは、人間のはかなさや悠久の自然の中で、移ろいゆくものを美しいと感じる感性をいいます。散りゆくさくらが美しいと思うのは、まさにこれにあたるといえるでしょう。

●このような感性から、さくらを最も愛した歴史上の人物、さくらを詠んだ歌人といえば、西行法師の名があがるでしょう。西行は

『山家集』のなかで、さくらの和歌を140首も詠んでいます。そこで西行に関して、次の問題です。

**【問題三】** 西行は『山家集』に載るある和歌で、「願はくば」と詠んで、さくらの花の下で「あること」を叶えたいと思っていました。その「あること」とは何でしょうか。

- (あ) 酒がのみたい
- (い) 踊りたい
- (う) 死にたい
- (え) 眠りたい

○(あ) だったら、お花見になるね。

○(う) かな。たしか桜の下に死体が埋まっているというのを、何かで聞いたことがある。

●よく知っているね。そういう小説もあります。この和歌は、西行が、とてもさくらの下に埋まっていたことを物語るものとしてよく知られています。正解は(う)。

「ねがはくは花の下にて春死なん そのきさらぎの望月のころ」。実際に、この歌の通り、西行はさくらの季節満月のもとで生涯を閉じたということです。西行はさくらとの一体化を望むほど、その美しさ・はかなさ「もののあはれ」にのめり込んでいたのではないのでしょうか。

●散りゆくさくらを美しいと思う気持ち、いわゆる「もののあはれ」という情緒は、日本人がとりわけ鋭いと指摘するのが、藤原彦氏です。

藤原氏は「情緒と形の国、日本」(『国家の品格』)とエッセイのなかで、すぐれた日本人の感性について述べています。資料を一読してください。

**【資料一】**

悠久の自然と儂い人生との対比の中に美を発見する感性、このような「もののあはれ」の感性は、日本人がとりわけ鋭い。…(中略)：

この一例が桜の花に対するものです。桜の花はご存知のように本当に綺麗なものはたったの三、四日です。しかも、その時をじっと狙っていたかのように、毎年風や嵐が吹きまくる。それで「アアア」と思っているうちに散ってしまう。日本人はたった三、四日の美しさのために、あの木偶の棒のような木を日本中に植えているのです。

桜の木なんて、毛虫はつきやすいし、むやみに太いうえにねじれていて、肌はがさがさしているし、花でも咲かなければ引っこ抜きたくなる木です。しかし、日本人は桜の花が咲くこの三、四日に無上の価値を置く。たった三、四日に命をかけて潔く散っていく桜に、人生を投影し、そこに他の花とは別格の美しさを見出してい

る。だからこそ桜をことのほか大事にし、「花は桜木、人は武士」とまで持ち上げ、ついに国花にまでしたのです。(中略)

アメリカ・ワシントンのポトマック川沿いにも、荒川堤から持つて行った美しい桜が咲きます。日本の桜より美しいかもしれない。しかしアメリカ人にとつてそれは、「オーワンダフル」「オービューティフル」と眺める対象に過ぎない。そこに儂い人生を投影しつづ、美しさに長嘆息するようなヒマ人はいません。

●日本人のさくらに対する気持ち、面白い語り口で理解することができます(生徒には傍線部に注目させる)。朽ちゆくもの・枯れゆくもの・滅びゆくものに、美しさを感じる心は、欧米人には、なかなか理解してもらえないのかもしれないね。

#### (四) さくらのイメージ 日本人の心

●藤原氏が説くように、私たちの先人は、さくらを「国花」と考えるようになりました。さくらは、日本を象徴する花と位置づけられるようになったのです。

【問題四】 次の歌は国学者本居宣長の詠んだもの。「」に入る言葉を考えましょう。宣長は、何をたとえて「朝日ににほふ山桜花」と言ったのでしょうか。

敷島の「」を人とはば

朝日ににほふ 山桜花

○「朝日」ってあるから、日出ずる国のような感じかな。

○要は、日本の心みたいな言葉じゃないの？

○大和魂みたいな。

●そうですね。答えは、ズバリ「大和心」です。大和心とは日本人の心ということ。その心は、清々しい「朝日ににほふ山桜花」であると詠んでいるわけです。

本居宣長の思想は、幕末・明治維新前後から、日本人のナショナルリズムに大きな影響を与え、宣長のこの歌によって「桜＝国花」というイメージが定着するようになったといえます。

明治時代になると、桜のなかでも、ソメイヨシノ(柴井吉野、江戸末期の新品種)が人気を呼び、城跡や公園・堤防や学校に盛んに植栽され、さくらのイメージが日本人の間に普及していったということとです。

●それでは、本居宣長が、さくらに喩えた「大和心」(日本人の心)とは、何を表しているのでしょうか。

次の資料にあげた新渡戸稲造の『武士道』(奈良本辰也訳)を読んでいきましょう。

#### 【資料二】

サクラは、私たち日本人が古来から最も愛した花である。そして

わが国民性の象徴であった。宣長が用いた「朝日にはほふ山ざくらばな」という下の句に特に注目されたい。

大和魂とは、ひ弱な人工栽培の植物ではない。自然に生じた、という意味では野生のものである。それは日本の風土に固有のものである。その性質のあるものは偶然、他の国土の花と同じような性質を有しているかもしれない。だが、本質において、これは日本の風土固有に発生した自然の所産である。

また私たち日本人のサクラを好む心情は、それがわが国固有の産物である、という理由によるものでない。サクラの花の美しさには気品があること、そしてまた、優雅であることが、他のどの花よりも「私たち日本人」の美的感覚に訴えるのである。私たちはヨーロッパ人と、バラの花を愛でる心情をわかちあうことはできない。バラには桜花のもつ純真さが欠けている。それのみならず、バラはその甘美さの陰にとげを隠している。バラの花いつとなく散り果てるよりも、枝についたまま朽ち果てることを好むかのようである。その生への執着は死を厭い、恐れているようでもある。しかもこの花にはあでやかな色合いや、濃厚な香りがある。これらはすべて日本のサクラにはない特性である。

私たち日本の花、サクラは、その美しい粧いの下にとげや毒を隠しもってはいない。自然のおもむくままに、いつでもその生命を棄てる用意がある。その色合いは決して華美とはいいがたく、その淡い香りには飽きることがない。

(中略)

太陽は東方から昇り、まず最初に極東のこの列島に光を注ぐ。そしてサクラの芳香が朝の空気をいきいきとさせる。このとき、このうるわしい息吹きを胸一杯に吸うことほど、気分を清澄、爽快にするものはないであろう。

●新渡戸は、日本の武士道を世界に紹介するために、英文でこの本を書きました。その中で、「武士道」という日本人の精神を、さくらにたとえている。とりわけ、さくらのぱつと咲いて、ぱつと散るさまに、日本人の高潔さ・いさぎよさという美德を見出していると書かれています(生徒には傍線部を注目させる)。

●このさくらのイメージは、日本人の美德を示すものとして、近代の日本人のあるべき姿として、とらえられるようになりました。とりわけ、軍人のあいだでは、「同期の桜」をはじめ、軍歌などにも盛んにさくらがうたわれています。兵隊さんたちは、はかなく散りゆくさくらに自分自身を重ね合わせていたのです。

### 【資料三】

①いざさらば我は御国の山桜

母の御元にかえり咲かなむ

(海軍中尉、緒方襄)

②散る花のいさぎよきをばめでつつも

母のこころはかなしかりけり

(緒方襄の母)

③ 蕾にて散るも又よし 桜木の

根のたゆことのみなきを思へは

(海軍少尉、滝沢光雄)

●①の緒方中尉は、関西大学在学中に学徒出陣し、パイロットになり、志願して神風特別攻撃隊の桜花隊に入隊しました。この歌で息子の思いを知った母、三和代さんが②の歌を詠みました。中尉の歌には、祖国日本のために命を捧げる高潔さ・いさぎよさが、散りゆくさくらに込められています。

●また、③の滝沢少尉(当時は一飛曹)は飛行予科練習生に志願し、昭和十九年、第一神風特別攻撃隊山桜隊の隊員としてレイテ湾にて戦死を遂げました。桜の木の根が絶えることがなければ、自分は奮のままでよい、と歌った滝沢少尉は、当時何歳だったと思いますか。実は、みなさんとほぼ同じ十八歳だったということです。

(五) 日本人にとって「さくら」とは? (へまとめ)

●今日は、わたしたちの先人たちが残してきた和歌を手がかりに、日本人のさくらへの想いを考えてきました。やはり、わたしたちにとって「花」とは、梅(奈良時代ころまでは大陸の影響で「花」といえば梅だった)でも、チューリップでも、バラでもなく、「さくら」なのだという実感が湧いてきませんか。

歴史的に見ていくと、日本人は、それぞれの時代の心情を、さく

らに託してきたということが分かります。そして「さくらの散りゆくさま」は、「もののあはれ」という日本人の独特の情緒をあらわし、やがて日本人の心となって、とりわけ高潔さ・いさぎよさを表現してきました。

まさに、さくらは私たち日本人を代表する、日本を象徴する花と言えるでしょう。そして、時を経て日本人がずっと受け継いできた、さくらのイメージは、現代のヒット曲のなかにも通じるものがあるのではないのでしょうか。

### 三 生徒のおもな感想

最後に、生徒が授業の終わりに書いた、おもな感想をあげて、授業報告を終えたい。

○桜はぼくの大好きな花です。日本人にふさわしい花だと思えます。派手すぎず、そして早いうちに散ってしまう、いさぎよさがぴったりです。小学校のときに桜の詩を書いて先生にすごくほめられたことが今でも心に残るさくらの思い出です。

○桜の季節になると、なぜ天気予報とか、みんなで取りつかれたように騒ぐのだろうと書いていたけれど、今日の授業で、さくらと日本人の深いかわりを知ることができた。

○わたしは、満開のさくら道を歩くのが好きです。それから、外国の人はさくらをあまり好きでないというのを聞いたことがあります。でも日本人ならでは、その良さを共感しえることは、うれしいことだと思います。

○さくらほどの時代でも人々から愛されている花だと思った。日本人は感受性が豊かなので、その時代、その歌を詠んだ人の心情を知ると、とても奥が深いものだなおもった。

○散るさくらに対する日本人のイメージは今も昔も変わっていない部分があるのだなと思った。昔の和歌からいろいろ情景とか心情とかを考えられて勉強になった。

【おもな参考文献】

- ① 牧野和春 『新桜の精神史』中公叢書
- ② 小川和佑 『桜の文学史』文春新書 二〇〇四
- ③ 田中秀明 『桜信仰と日本人』青春出版社 二〇〇三
- ④ 白幡洋三郎 『花見と桜』PHP新書 二〇〇〇
- ⑤ 藤原正彦 『国家の品格』新潮新書 二〇〇五
- ⑥ 新渡戸稲造 奈良本辰也訳 『武士道』三笠書房 一九九三
- ⑦ 靖国神社編 『いざさらば我はみくにの山桜』展転社 一九九四
- ⑧ 靖国神社編 『散華の心と鎮魂の誠』展転社 一九九五